

熊との遭遇確立（単独と集団の比較）

個人（単独）と集団では、熊との遭遇確率も、遭遇後の安全性も、集団の方が有利と考えられています。

1. 熊に遭遇する確率

項目	単独	集団（5～10人程度）
熊に気付かれず接近する可能性	高い	低い
熊との遭遇確率	高い	低い
熊が先に立ち去る可能性	低い	高い

熊は人を積極的に襲う動物ではなく、人の存在に気付けば避けることがほとんどです。

集団では

- 会話
- 足音
- ザックの擦れる音

などが自然に発生するため、熊が早く人間に気付き、山奥へ移動することが多くなります。

一方、単独者は静かに歩くため、熊との距離が近くなるまでお互い気付かず、「ばったり遭遇」が起こりやすくなります。

2. 遭遇した場合の安全性

項目	単独	集団
威圧効果	小さい	大きい
熊が逃げる可能性	普通	高い
応急処置	自分だけ	仲間が対応可能
救助要請	困難	容易
万一の事故	非常に危険	被害軽減しやすい

熊は体格や人数も判断すると考えられており、

大人数は「大きな相手」と認識されやすいため、逃げるケースが多く報告されています。

3. 実際の事故傾向

日本で報告されている熊による人身事故では、

- ・ 単独登山
- ・ 山菜採り
- ・ 溪流釣り
- ・ 写真撮影
- ・ 犬の散歩

など、一人で行動していたケースが比較的多く見られます。

一方、10人前後の登山パーティーで熊が積極的に襲ってくる事例は少ないですが、次のような状況では集団でも危険です。

- ・ 子熊に近づいた
 - ・ 母熊との距離が極端に近い
 - ・ 藪の中で突然遭遇
 - ・ 熊の逃げ道を塞いだ
-

4. 集団ハイキングでは

約20～30名規模で歩く場合は、

- ・ 声掛け
- ・ 会話
- ・ ストックの音
- ・ 足音

これらが熊への十分な存在アピールとなるため、

熊鈴だけに頼る必要性はそれほど高くありません。

むしろ

- ・ 静かな先頭が熊と至近距離で遭遇しないようにする
- ・ 見通しの悪い場所では声を出す

- ・ カーブや沢沿いでは注意喚起をすることの方が効果的です。
-

5. 総合評価

比較	単独	集団
熊との遭遇	★★★★☆	★☆☆☆☆
熊に襲われる危険	★★★★☆	★☆☆☆☆
救助体制	★☆☆☆☆	★★★★★
安全性	★★☆☆☆	★★★★★

団体向けの結論

- ・ 単独ハイキングより集団ハイキングの方が、熊に遭遇する可能性は低く、安全性も高いと考えられます。
- ・ ただし、「集団だから絶対安全」というわけではありません。
- ・ 藪の多い場所や見通しの悪い場所では、先頭が適度に声をかける、必要に応じて熊鈴を活用するなどの対策を組み合わせることが重要です。
- ・ また、最後尾が大きく離れると集団の効果が薄れるため、適切な隊列を維持して歩くことも重要な安全対策です。

まとめ

年間を通して多くの団体山行を運営されている場合は、「熊対策は必要だが、過度に恐れない」というバランスの取れた考え方が大切だと思います。

次の5項目だけでも十分実践的な指針になります。

1. 熊の生息情報・目撃情報を事前に確認する。
2. 見通しの悪い場所や沢沿いでは、先頭が声を出して人の存在を知らせる。
3. 隊列を長く伸ばし過ぎず、最後尾が見える程度の間隔を保つ。
4. 熊を見つけても近づかず、写真撮影を優先しない。

5. 熊の痕跡（足跡・糞・新しい爪痕など）を見つけたら、状況によっては引き返す判断も行う。

特に集団ハイキングでは、リーダーが「引き返す勇気」を持つことも重要な安全管理の一つです。